

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 37号

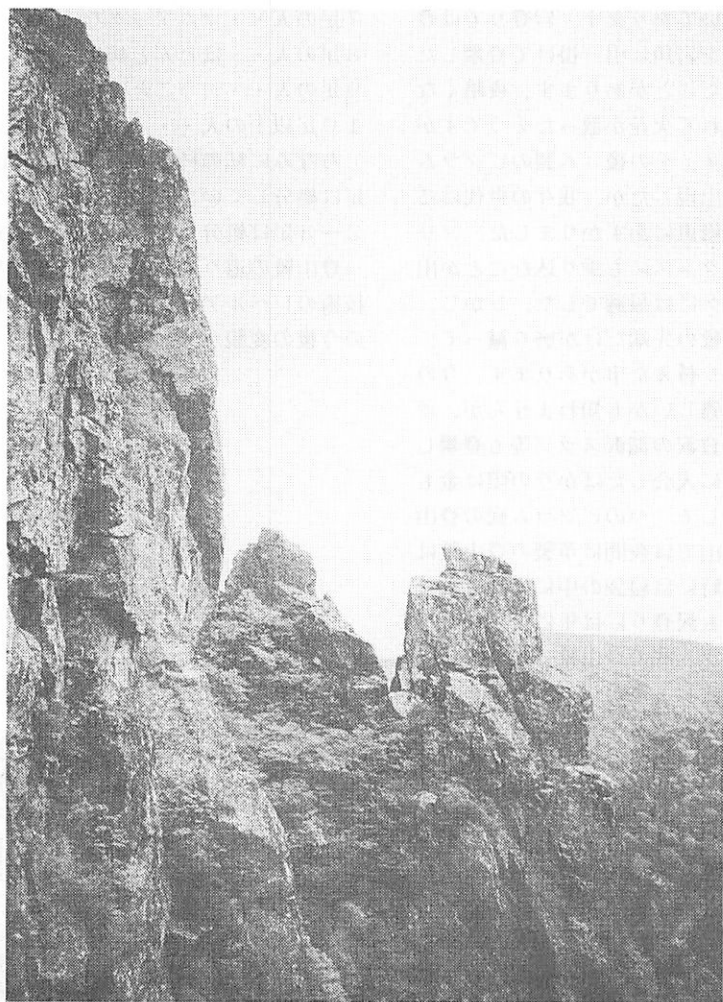
2000年4月~6月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 2000' 春 No3 7



縫道石山…西稜より南東稜を望む 《Photo by, MOTOZU》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

登山靴考

私が登山靴を買ったのは今から約30年前にキャラバンシューズを購入したのが最初でした。これを読んでいる皆さんも最初買った登山靴の記憶は鮮明に残っている事でしょう。なにしろ登山という極道の世界に入るきっかけの最初の道具ですからネ。私は履いた事はありませんがナーゲルという靴をご存知ですか？。ACC-Jの山童祭の名称ナーゲル祭の由来にもなっている鉄靴の事です。昔は革製の登山靴の底にムッガー&トリコニー等の鉄釘を打った登山靴を履いて、夏冬を問わず山を登ったと聞いております。岩登りでは登山靴の先端に打った鉄釘を岩角に引っ掛けて登攀したと、昔の登攀記録で読んだことがあります。夜暗くなると靴底の鉄釘が岩に擦れて火花が散ったそうですが一度見てみたしものですネ。その後ゴム製のビブラム底を貼り付けた登山靴が出現したが、我々の世代はこのビブラム底の登山靴の恩恵にあずかりました。フリクションが効き細かいスタンスにも乗り込むことが出来て、ロッククライミングには最適でした。しかし、岩登りばかりしていると靴の先端だけが磨り減って、何回かはビブラム底を張り替えた事があります。今の状況からは想像する事が難しいかも知れませんが、ビブラム底の登山靴で一ノ倉沢の滝沢スラブ等も登攀したものです。ACC-Jに人会したばかりの頃は金も無かったので、1年を通して一つのビブラム底の登山靴で登っていました。冬山では夜間に革製の登山靴は凍ってしまうので、就寝時には寝袋の中に入れて眠ったものです。また当時でも沢登りには年に1〜2度行きましたが、これもビブラム底の登山靴で登りました。今では想像もつかない事でしょうが……。ですから沢登りでは出来るだけ登山靴を濡らさない努力をしたものです。その後、沢登りでは地下足袋に草蛙履きで登りましたが…。手甲・脚半に地下足袋・草蛙、そして頭には日本手拭で鉢巻とくれば。昔の旅人姿ですが本当の話ですヨ。今では溪流シューズにウォータースパツで積極的に水に親しみながら沢登りをエンジョイしております。ロッククライミング用靴に関してはその後、フラットソールのEPシューズが発売になりましたが、当時は本当に金が無かったので普通のランニングシューズのゴム底をグラインダーで削り取り、フラットソールにしてゲレンデで練習した記憶があります。現在ではクライミングシューズもアウトドア用とインドア用に分化され、更に沢登り用の靴、雪山用のブラブーツ、山スキー用のブラブーツ等に分化されていますが、あなたは登山(山スキーも含めて)に使用する

靴を何足持っていますか？。あなたの持っている登山用靴の数で、独断と偏見により下記に分類してみましたので、自分の持っている登山用靴を教えてください。

- 1足の人・・・初心者
- 2足の人・・・初級者
- 3足の人・・・中級者
- 4足の人・・・上級者
- 5足の人・・・ベテラン
- 6足の人・・・お金持ちの人
- 7足の人・・・マニアックな人
- 8足の人・・・ほとんど病氣
- 9足の人・・・言うことナシ
- 10人以上の人・・・アンタはエライ

ちなみに私の持っている靴は8足です。これでも3足は処分していますが、今後も履かない靴があるので2〜3足は処分したいと思っています。

登山靴の選り変わりが、登り方の変化となり、登攀技術のレベルアップとなった事は事実であり、登山靴の今後の変貌が楽しみです。

(木村一 記)



《目次》

2000年 春号 4月～6月 ACC-J 茨城

登山靴考	・・・	1
集会報告	・・・	3
山行報告	・・・	4
尾瀬・至仏山（山スキー）	・・・	5
谷川岳・東尾根	・・・	6
飯縄山（山スキー）	・・・	7
外秩父7峰縦走	・・・	8
朝日岳	・・・	8
鳳凰三山	・・・	10
GW合宿・穂高岳周遊入山日	・・・	10
*寒かったー長かったー（北穂岳東稜）	・・・	11
*甘かった、今日もだ。（前穂岳北尾根）	・・・	12
*すいてはいたけれど岳（沢登岩尾根）	・・・	14
*下山日	・・・	15
*穂高潤沢（山スキー）	・・・	15
* 滝谷4尾根	・・・	17
尾瀬・燧ガ岳	・・・	18
縫道石山	・・・	19
谷川岳・衝立岩雲稜第2ルート	・・・	21
奥多摩・入川谷	・・・	23
阿武隈川・白水沢講習会	・・・	24
大荒川谷	・・・	26
友好山岳団体の月報・会報・その他	・・・	27
編集後記	・・・	29

*表紙ー前穂岳北尾根の夜明け

{Photo by K. Motozu}

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 4 月 】-----

4 月 1 2 日

出席者 本図、木村、菊地、渡辺、吉田、松井

4 月 2 6 日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田

-----【 5 月 】-----

5 月 1 0 日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、渡辺

5 月 2 4 日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田

-----【 6 月 】-----

6 月 7 日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

6 月 2 1 日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

山行報告

《2000年 4月～6月》

---【 4月 】---

4月1～2日	尾瀬至仏山山スキー	L 木村、古山、名雪、松原
4月 3日	谷川岳東尾根	L 本図、吉田、渡辺
4月 9日	飯縄山山スキー	L 本図、木村、菊地、渡辺、名雪、松原 吉田
4月22日	御岩山	渡辺、ほか数名
4月23日	外秩父7峰縦走	渡辺、ほか数名
4月23日	古賀志山	吉田、ほか1名
4月29～30日	鳳凰三山	栗原、ほか1名
4月29～30日	朝日岳	L 本図、木村、菊地、渡辺

---【 5月 】---

5月3～7日	【穂高合宿】	
	北穂岳東尾根～前穂岳北尾根～岳沢登山尾根	L 本図、吉田、渡辺
	潤沢（山スキー）	木村、中島
	滝谷4尾根	L 古山、笹平
5月14日	三ツ峠	L 本図、渡辺、生井、ほか数名
5月21日	尾瀬燧が岳	L 木村、笹平、松原
5月27～29日	縫道石山	L 本図、渡辺、生井、ほか数名

---【 6月 】---

6月4日	谷川岳一ノ倉沢衝立岩雲稜第2ルート	L 古山、生井、笹平
6月4日	奥多摩・入川谷	L 本図、吉田
6月10～11日	阿武隈川白水沢	本図、木村、ほか20名
6月17～18日	奥秩父大荒川谷	L 本図、笹平、渡辺
6月25日	鹿沼の岩場	本図、ほか数名

尾瀬 至仏山 山スキー

2000. 4. 1~2

パーティ L 木村一、古山正文、名雪博二、松原丈夫

今冬からテレマークを始めましたが、スキー場のゲレンデでは1ステップテレマークターン&2ステップテレマークターンが何とか出来るようになりました。しかし、実際の山の中ではどこまで通用するのか不安はありましたが、今回の尾瀬至仏山へはテレマークスキーを持っていくことにしました。

まだこの時期鳩待峠への道路は除雪途中であり、戸倉集落から1時間程登ったところからスキーにシールを貼付けて今回のスキー登山はスタートしました。山は一面雪景色ですが既に渓流釣りは解禁になっているので、途中釣師の姿を2~3名見かけました。釣竿を持参している名雪氏&松原氏は竿を出したい様子ですが、朝から怪しかった空から大粒の雪が舞い始めたので諦めて先を急ぐことにした。鳩待峠に着く頃には風も強くなり、峠は風の通り道になっているらしく凄まじい風の音と共に烈風が吹き抜けているので、ここ鳩待峠にテントを設営する事にした。風を避けて鳩待山荘裏手の窪地にテントを張り、山荘裏手の丘に登りスキーの練習をする事にしたが、私の未熟なテレマークターンでは歯が立たずアルペンターンになってしまうのは仕方のない事か・・・・。

ここ雪深い鳩待峠では時間がゆったりと流れていき、豊富なアルコールを嘯みながら、開幕から2連敗したジャイアンツの今年の優勝は不可能との結論の中、深い眠りに落ちていった。

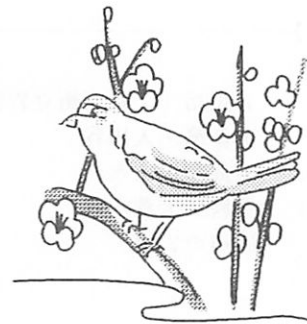
翌日は6時半にテントを出発。朝の冷気の中をシールを滑らす音だけが聞こえる快適な登高で1866mのピークまで登り、ここから悪沢岳を目指して樹林帯の中をトラバース気味にシールを効かせて登り、更に小至仏山へは無樹林の白い斜面を登るが、途中傾斜が増してきたのでスキーを脱いでザックにスキーを着けてトラレーゲンの登高に変更。先頭を登る名雪氏はスキーを肩に担ぎ、足元はアイゼン無しの登高で着実に歩を進めて行く。小至仏山の頂上は風が強くスキーを背負った体では風に煽られてしまいそうだ。小至仏山からは谷川岳の東面が真正面に望まれ、今日の天候では東尾根パーティも登攀成功間違いなさそう。ここから雪の斜面をダラダラと登ると至仏山山頂に到着。至仏山の頂上はただっ広い雪原になっており360度のパノラマは素晴らしい。

写真を撮り小休止後大滑降の準備に入るが、昨日のスキー練習でテレマークターンには見切りをつけていたのでシュリングで踝固定具を急造し、アルペンターンで滑降する事にした。山頂からの数ターンは順調に滑りだったが、少し下ると雪崩の跡が条になっており、そこを斜滑降で滑るものだからまるで洗濯板の上を滑っている感

じである。数百米の斜滑降ターンの繰り返して悪沢岳下の斜面まで滑り込み小休止。ここからは樹林帯の中を鳩待峠に向けて快適な林間滑降。鳩待峠着11時30分。登頂を祝って乾杯して小休止後テントを撤収して戸倉集落に向けて車道を滑降開始。登る時は苦しかった車道も下山時は楽しい滑降。途中雪の割れた沢で釣竿をだすが釣果ナシ。除雪された所もしつこく車道の脇を滑り、更に車道に降りてからも僅かに積もっている吹き溜まりの部分を選んでスキーを走らせながら戸倉集落近くまでスキーで下降する事が出来た。

帰路恒例の温泉入浴後、茨城へ。

(木村 記)



谷川岳・東尾根

2000. 4. 2

パーティ L 本図一統、渡辺聡子、吉田仁

東尾根にこんなに早く戻ってくるとは、思いもしなかった。忘れもしない新人歓迎山行が、東尾根だった。

クラブに入り何度かの沢に入り、とある集会の時に次はどこに行きたいかといわれ今度は、乾いた岩に行きたいです、などと調子こいたことを言い、それならば谷川に岩場の散歩にいか、と言うことになった。確かに快適な岩場の散歩であった。雨が降ってくるまでは。オレは、いま、その時REIで買ったシューズを履いていたんだけど、これが全くのダメダメ靴だった。何度もスリップしそうになり、それは恐ろしい思いをした。その時誰かが言った

『ここは、冬にくるといいルートになるんだよ』冬にこんな恐ろしい所にくるなんて、2年後か、3年後か、いや一生来ないかも知れない、その時オレは、そう思った。

東尾根の山行が決まったのは八ヶ岳の赤岳主縦に登りにきた時だった。隊長に今回の登りいかんでは、来週いい所に連れて行ってやると言われた。いい所つて何所だろう、グアムか、ハワイか、サイパンか、まあどっちにしろヌクヌクの所に連れて行ってくれるのだらうと思っていたが、ふたを開けてみれば谷川のバリエーションでした。今回は、出発が早いので、いつもより1時間早く集合していつもは、使わない高速を使い11時には、立体駐車場にデリカを滑り込ませた。3時間程、仮眠をして3時に出発。へっ電をつけてcobraをぶら下げ(何所で

使うんだ)歩き出すが、風が物凄く強い。こんな状況で稜線なんかに出たら茨城までブッ飛ばされそう。たまたま何度も立ち止まりながらやっとの事で一ノ倉谷合いに到着。デブリをかわしながら一ノ沢を目指す。一ノ沢は、かなりの急登で石灰岩のコルネ状にクラストしている。シンセンのコルに着く頃には、アキレス腱が、のび切っちゃってるんじゃないかと、心配になる程だ。そしてシンセンのコルで小休止、依然、風強し。いよいよ東尾根に入る。途中胸を付くような雪壁で1ピッチロープを出して第2岩峰に到着。隊長がロープをのぼす。その先の、悪いクライムダウンをこなし観倉台では、よく雑誌に出てくるそのままの景色が、そこにはあった。順調に進むが、1ヶ所サラサラのパウダースノーの所をトラバースする所があって雪に慣れてないオレは、一歩出すごとに全身の毛が、逆立つ程の緊張感を味わう。そし



谷川岳・東尾根《観倉台に行く・・渡辺》

て第一岩峰に到着。巻道のトレースが、ばっちり着いているけど、岩峰に行くことにする。トップで取付くが、見た目よりムズイ、途中スリングが、掴んで下さいとばかりにあったので、遠慮なく使わせて頂くことにする。が!、それに体重を掛けた瞬間、見事にブッ飛んでしまった。そのスリングは、アプミの様になっていて、その末端を掴んでしまったらしい(チェック不足)。気を取り直して、再度トライ。今度は、100万回程、チェックをして無事通過。その先は、快適な雪稜歩きがつづき、最後にちょっと嫌らしい雪庇の下をトラバースして終了した。

土合(2:53)――一の倉(4:06)――シンセンのコル(6:14)――頂上(10:50)――土合(13:37)

(吉田 記)

飯縄山スキー

2000. 4. 9

パーティ L 本図一統、木村一、渡辺聡子、菊地光夫、東京ACC-Jより4名

今回の山スキーは東京ACC-Jのパーティと合同山行の為、現地集合にして戸隠スキー場に待ち合わせ途中携帯電話で連絡をとりながら東京パーティは中央高速より、茨城パーティは信越道からの合流となる。久しぶりの顔合せなので車の中で夜遅くまで一杯やっていた。朝はスキー場のリフトが動き出してからなのでいつもより遅くまで寝ていられた。スキーヤーに混じってリフトを待っていたがスキー場が今日でOFFになるので最終サービスでリフト代がタダとの事でラッキー。タダ乗りリフトを2回ほど乗りつぎ、飯縄山を目指す。リフトがかなり上部まで行っており、歩くこと1時間プラス位で山頂である。ここで風を避ける斜面に腰を下ろして行動食を食べ、休憩。後はスキー板を付け下るのみであった。が、沢通しコースなので樹林帯が多く快適ではなかった。高度が下がるとなおさらツボ足状態でコース不明瞭で嫌になってくる。すると林道に出て約30分も歩くと、朝乗ったリフトの反対側のリフトで元に戻る予定だったの

が、こちら側のリフトはすでにクローズしてしまい、誰かが駐車場まで行き車を持ってこなければならぬので困っていたがそこで頑張り屋のナベちゃんが私が行きますとの事。時代もずいぶん変わって女の子はたくましくなったもんだ。車をとってきて全員乗り込むと本図氏が

『菊地へ、スキー場のリフトがタダなのだから少し滑っていくべ』

との事で一番上のリフトまで行き全員で直滑降で松原、木村氏が先頭を切って滑っていった。

帰りは風呂に入り、戸隠へ来たのだから、戸隠そばのうまいのを食べて帰ってきた。

4月9日 飯縄山

駐車場発(8:40)ー頂上(10:07)

(菊地 記)



飯縄山山頂にて..『シーハイル!!』

第15回 外秩父七峰縦走ハイキング大会

2000. 4. 23

パーティ 渡辺聡子

私は頂上が大好きだ。天気が良くて時間も十分ある時に、終了点だからといって頂上を目の前にして帰って来るなんてとても考えられない。頂上を踏んだ時、その山の記念バッチを買うことは私の楽しみのひとつである。なんとかと煙は高い所が好きというが私は間違い無くなんとかなんだろう。ついでに言えば、私は100名山も大好きだ。100名山に限らず日本全国にある何とか三山というのにも心は躍るし、山に限らず名水100選とか地域限定、期間限定というのにも血は騒ぐ。つまるところイベントものが大好きで、よく「ミーハーが抜けてない。」とか「あほか!」といわれ、自分でもいささかそういう気がしなくても無いが、同じあはならやっぱり踊らなきゃ!

さて、この外秩父七峰縦走ハイキング大会は文字どおり7つの山の登り下りを繰り返す全行程42.195kmの里山歩き大会である。一度に7つの山の頂上を踏むことができ、おまけに参加料は無料。参加賞、参加バッチに加え時間内に完歩できた人には完歩賞としてTシャツもしくは帽子、そして完歩バッチがもらえるという、まさに私にはうってつけのイベントである。

今回で参加5回目という友人2人と一緒に東武東上線沿いのホテルに前泊し、当日の朝5時にホテルを出ると

あちこちのホテルからザックを背負った人たちが現れ駅へ向かっていた。朝1番の臨時電車の中は七峰縦走の参加者でいっぱい、中には完歩バッチをたくさん帽子にならべている人や毎回もらえる参加賞でコーディネートしている人もいた。電車が小川町駅についてドアが開くと同時にみんなダッシュ!。少しでも早くスタート地点に並びたいらしい。圧倒されながらスタート地点に行ってみると混雑を避ける為なのだろう、既にスタートは切られていたので私たちも並ぶことなく歩き出した。その後は途中で鰻頭や豚汁に足を止められたり、牧場の牛乳やソフトクリームに心をうばわれたり、さしいれの漬け物達に骨抜きにされたりしたが、順調にチェックポイントを通過し、無事に完歩する事ができた。完歩バッチとTシャツをゲットしてほくほくだ。天気もよく、完歩を目指してガシガシと歩く人もいれば、ケーキ1ホールをザックに入れて途中でティーブレイクをしている人もいたりして、楽しい大会だった。それにしても途中で食べた大会の日限定のお鰻頭はおいしかったなー、また来年も買いにいかなくちゃ。

(渡辺 記)

春山・朝日連峰

2000. 4. 29~30

パーティ L本岡一統、木村一、渡辺聡子、菊地光夫

季節も5月が近くなると、茨城の田園には田植えの風景があらこちらで目にする今日この頃である。

夜、茨城を出るときはお月様も顔を出していたのが、東北道を走り山形自動車道に移った辺りよりみぞれ交じりの雨が降ってきた。西川ICで降りて車は古寺の集落の奥のほうに建設省あるいは地元の管理下で行っている除雪ステーションの軒下に車を停め仮眠をとった。朝起きてみると、朝モヤであったが雨は止んでいたため天気は回復の方向である。出勤の人が来たので、車を邪魔にならない所へ駐車する。準備をして古寺鉱泉へと向かう。回りは茨城とは打って変わって雪一色であった。でも、この雪深い集落にも春が近づいている事が人々の生活でわかる。歩くこと1時間ぐらいで古寺鉱泉である。古寺鉱泉は宿のすぐ前が古寺川で右岸から橋を渡ると宿の玄関である。看板は朝湯館とかすれた文字で書かれてあった。ここに登山計画書を提出して小屋の裏側の尾根

に取り付いた。尾根はブナ林の急登でハナヌキ峰から派生している尾根を登り詰めれば、古寺川と根子川との分水嶺となっていて、道は小朝日岳を目指して尾根が続いているのがわかる。

天気は良好で気持ちは良い春山登山である。ハナヌキ峰を越えた付近より左側の斜面には大きく張り出した雪庇がず〜っと続く。今日の幕营地である古寺山はもうすぐである。適当な場所を見つけ4人で雪の上を足で踏み固めてテントを張り、回りには風があたらない程度のブロックを作る。目の前にはどお〜と小朝日岳が見えて右手前方遠くに雄大な大朝日岳のシルエットが夕闇に輝いていた。夕食はサトちゃん特性のサケの粕汁鍋だった。ビールをのみながらの楽しいひとときだった。

翌日は早朝5時出発。行動食と必要なものをザックにつめて出発となる。

今日は、朝より強風が吹き荒れており、正面を向けな

いくらいだった。小朝日岳は登らず右側の近道を利用して鳥原山から来ている一般コースと合流。森林限界を抜けると急な登りであった。一昨日降った雪なので真っ白に輝いていた。そこに急風で出来た雪の芸術とも思われる模様がとても奇麗だった。まるで鳥取砂丘のようだった。ここの急登はアイゼンが程よくきいて、上を見ると先の山波が見えず真っ青な空だけが見えるので、別世界を思わせる。ここを登ると大朝日岳は目の前である。が、ここで休まず一気に頂上目指し登る。相変わらず風が強く山頂では360°のパノラマを見て小屋へと下り、行動食を食べ休憩後、小屋を出ると先程まで風がかなりおさまったようであった。今来た道をテントまで下りはあっという間に着き、テントを撤収後、昨日登ってきた道を下った。途中合体の木という名の銘木があり、昨日はあまり研究（気にしなかった）しなかったの、帰りはなぜ合体の木なのかをまじと研究をして帰ることにした。1時頃には古寺鉱泉に着き、これより長い林道を歩きとなり、元気な木村氏はトップで先を行き、本図、渡

辺組はふきのとうを採りながら歩いていった。

私は山スキー用のプラブーツを今回の登山に使った為に下りの時は靴があたり、痛くて、痛くて歩けない状態であった。ので、一人のんびりとピッコを引いて歩いていると送迎用のスノーモービルが、ピッコを引いていて気の毒と思い乗せてくれたのでゴールには本図、渡辺組よりも一足早く到着する。

スノーモービルで彼らを抜くときはじつに気持ちのいいもんで腹の中から喜びがあった。Vサインを送りながら脇をヒュー〜イと抜いていくと、本図さんは

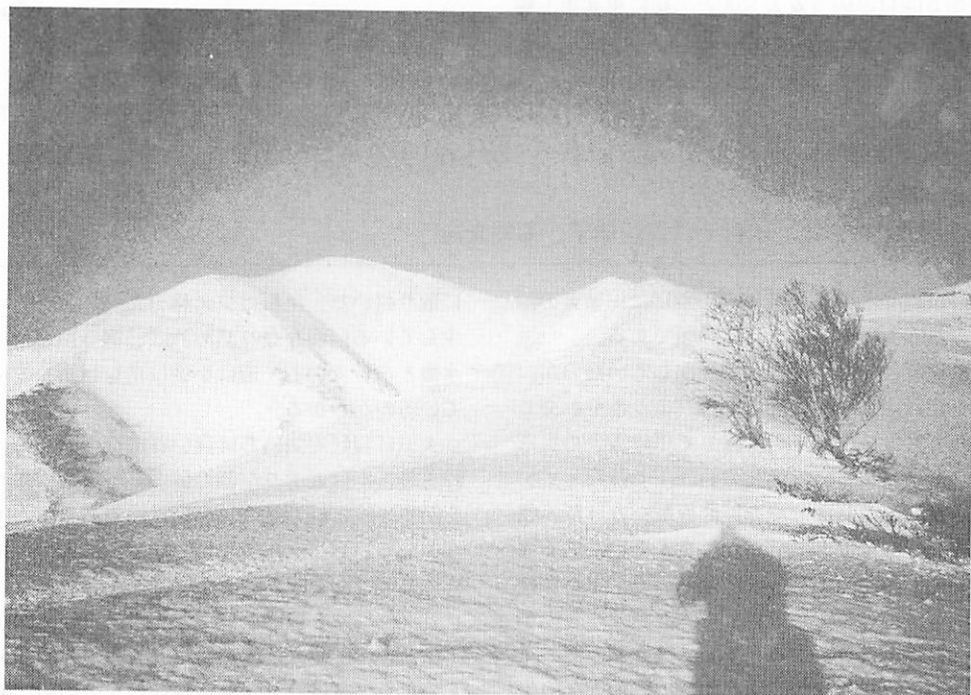
『菊地〜！ずるいよ〜！』

と声にならない声が聞こえた。ん〜、これも一重に人徳だ。

4月29日 朝日岳

古寺(8:58)ー古寺山(14:00)

(菊地 記)



大朝日岳を望む

鳳凰三山

2000. 4. 29~30

パーティ L 栗原孝 (OB)、飯塚進 (無所属)

今、最先端に行く中高年の一般登山者として、春の鳳凰三山へ行ってきました。一般登山者なので、やはりセオリーどおりに山小屋に泊まらなくてはならないので、薬師小屋に一泊しました。夜叉神峠登山口からの登山中の登山者数は思ったより、少なく感じましたが、天候も良かったので、薬師小屋は満員状態でした。途中は雪が少なかったのですが、薬師小屋付近は新雪が多く、小屋は半ば雪に埋もれていました。山頂から見た北岳バットレスは迫力があり、何度見ても感動しました。数年前、雪の中で咲くキタダケソウを見に行った時を思い出し、また行きたいと思いました。日ごろの運動不足からリハビリを兼ねた久しぶりの登山でしたが、天気にも恵まれ、楽しい登山でした。

夜叉神峠登山口付近には、毒草で薬草のハシリドロコ

(根をかじると狂ったように走り出す)のつぼみがありました。この根は「ロート根」といい、日本薬局方にも載っている腹痛に使用する薬草で、学生時代この根を試しにかじったラグビー部の友人がふらふらになり、階段をころげそうになったのを記憶しています。

帰りに露天風呂が新しく出来た北岳荘に寄りました。ちょうど、露天風呂の正面にある2種類(ソメイヨシノ、オオシマザクラ)のサクラが満開で、この上もない花見ができました。

みなさん、バットレスの帰りは是非お立ち寄りください。

(栗原 記)

GW合宿・穂高岳周遊入山日

2000. 5. 3

パーティ L 本図一統、木村一、中島淳、吉田仁、渡辺聡子

GWの合宿は前穂、北穂、奥穂を一気に制覇してしまおうというゴージャスな企画だ。沢渡に到着したのは3時になろうという頃で、ぐっすり眠る間もなくすぐに朝が来てしまった。空は今にも泣き出しそうで雨の入山を覚悟せざるをえないようだ。みんな早々に出発準備にとりかかる。4泊5日なので荷物は大きさも重さもかなりの量だ。寝不足でこの荷物を背負うのかへ、きつそう。タクシーに大人5人とザック5つ、スキー板4本を無理矢理詰め込んで上高地へと向かう。上高地では想像以上に多くの人たちで賑わっていた。明神、徳沢は難なく通過し横尾へ。横尾でズックからブラブーツへと履き替えて、ズックは横尾にデポ。7日に戻ってきたときまで無事に残っているかどうかちょっと心配。ブーツの分だけ気持ち軽くなったザックを背負って洞沢へと歩き始める。左手に屏風岩を眺め、本図さんにルートの解説をしてもらいながら歩く。ときどきドーンという雪崩の音にドキドキ。本谷橋のところで一息いれる、ふう。本谷橋までは人もまばらだったのだが、ここから進行方向を見上げると人、ひと、ひと。洞沢へと向かう人達が1列になってとぎれることなくずーっとつながっていた。まるでえさを運んでいるありんこの列のようだ。私達も大きなえさをはこぶありんここと洞沢にあるテン場という巣に到着しACC-Jという部屋を作って落ち着いた。想像し

ていたよりもキツくはなく、おまけに天気もなんとか持ってくれた。どうやら本図さんが穂高に降るはずだった雨を一身に背負ってくれたらしい。水筒が割れてしまいザックの中が水浸しになってしまっていた。幸いシュラフは無事だったが、それ以外のものはすっかり濡れていてその晩のテントの中は物干し場となっていた。

5月3日 穂高

上高地(8:04)ー洞沢(15:01)

(渡辺 記)

寒かったー、長かったー（北穂東稜）

2000. 5. 4

パーティ L 本図一統、吉田仁、渡辺聡子

予定では、前穂の北尾根を登り、ACCJー東京のメンバーの待つ岳沢へと向かうはずだ。3時にみんな目を覚ましたけれど（昨日は確か8時半すぎに寝ただけだなあ～）、テントから外を覗き本図さんが『だめだなあ～』という。天気はいまいちらしい。とりあえず朝食を取り天気が良くなるのを待とうということになった。う～ん、幸先が悪い。行く気十分だっただけに気をくじかれてしまう。みんなは食べ終えたらとっととシュラフに入り寝てしまった。食べた直後に横になると牛になりますよ～。一人で起きていても仕方が無いので私も横になる。何時の間にか寝てしまったらしく

『天気が良くなったから行くぞ』
という声に起こされた。

『わーい、行きます、行きます。行きます』。時間は5時半をまわってしまっていたので前穂は明日に持ち越して北穂の東稜へ行くことになった。外に出てみると青空だ。俄然やる気がわいてきた。周りのテントも行動を開始したらしくすでに歩き出している人たちもいて昨日と同様ありんこ行列ができつつあった。木村さん、中島さんに見送られ、本図さん、吉田さんと共に出発し私達もありんこの列に加わる。時折、列からはずれ東稜へと向かうありんこ達がいて少しばかり焦る。かなり下の方から東稜に取り付いているパーティもあった。どのくらい歩いたのだろうか、取り付きへのトラバースの所へきたので行列からはずれゴジラ岩へと向かい、一

歩手前でひと休み。日差しがボカボカして心地よい、さあ、気合いを入れて行ってみよう！。ゴジラ岩の科尔へ行ってみると何だか人がたくさんいる。“え～！、こんなにいるのー！”。ゴジラ岩の背をこえて雪壁を登るだけだからすぐに順番がくるよ、と本図さんに言われるが待てども待てども一向に進まない。後ろにも大行列が出来てきた。そうこうしているうちに交信時間がやってきた。感度は良好、木村さん達はまだテントの中だった。頂上へ向かうトレースがまだついていないので最初のパーティがまだ抜けていないという事とゴジラ岩の背はまいていようだという事しか分からないまま時間はどんどん過ぎていく。さっきは晴れていたのにまた曇ってきて、風もビュービュー吹き付けてくる。うっー、寒い、寒いよ～。しばらくすると、1人が動けなくなっているらしいと前から伝わってきた。いったいどうしちゃったのかな



北穂・東稜・ゴジラ岩の背にて

～？、そんなに難しいのかな～？一、大丈夫かな～？、なんかドキドキしてくるな～。もう3時間近くたつのに十数歩しか動いていない。寒いよ～、寒いよ～。再び交信時間になってしまった。山スキー組は既にずいぶん登ってきて私達が見える所にいるらしい、どこだ、どこだ、いた～！。木村さんによると1人が岩にへばりついてしまい、そのうち力つきて雪の上に落ちてしまった。同じパーティの1人がロープをもって助けにきたから、じきに動き出すよとのことだった。なんで？？？ロープをつけないままクライムダウンしたのかな～？、クライムダウンか・・・、こわいな～。そうこうするうちにようやく最初の1人が東稜の科尔に姿を現わした。あーよかったこれでもう寒さとはもうお別れだー！！。最初の3人パーティが抜けるとあとは順調に進みだした。クライムダウンなんてするパーティはおらずみんな懸垂で下におり

ていった、そりやそうだよな。やっと順番が回ってきたので残置シュリングにロープをセットし本図さんにお伺いをたてると行けという合図。ではお先にということでもまず私が降りる。どんなに難しい所かとドキドキしながら降りたが25m弱の懸垂下降で雪面に降り立ち、岩を巻くようにして登り返して稜線に戻るというたったそれだけのことだった。なんで～!?なんでこれだけなのにあんなに待たされなくちゃいけないの～。後ろから吉田さん、本図さんが登ってきたので聞いてみると、答えは一言『へただから』。はい、そう

ですね。わたしも他の人から言われないよう精進しようっと。トレースのしっかりついた雪壁を登り北穂高小屋に到着。小屋にかけ込んで北穂のバッチをゲットする。頂上をしっかりと踏んだ後木村さん、中島さんの待つテントへと戻った。今日の前穂はず～っとガスに覆われていたが、天気図を書いてみると明日の天気はばっちりだった。さあいよいよ前穂の北尾根だ。

濁沢(7:08)ー北穂高岳(13:48)ー濁沢(15:00)

(渡辺 記)

甘かった、今日もだ・・。(前穂北尾根)

2000. 5. 5

パーティ L本図一統、吉田仁、渡辺聡子

朝(深夜?)1時にむっくりと起き出す。普段では寝てさえいない時間なのに。外を覗くと昨日とはうって変わって満天の星だ。周りのテントはひっそりと寝静まっている。しめしめ今日みんなが起き出す頃、私達は北尾根をのぼっているはず。食事をとって2時半頃、歩き出した。ひんやりとした空気が心地よい。こんな時間に動き始めるのは私達だけかと思ったら、なんと既にヘッドランプの明かりが前方にあった。方向的には北尾根で、どうやら単独らしく見える明かりは一つだけだった。昨日のトレースがばっちり残っていることを期待して歩くがなかなかみつからず、ようやく見つけたものは前を歩いている1人がつけたものだけだった。雪がしまっているため歩きやすく、リズムにのって順調に登っていく。後ろを振り返ると幾つかにまとまったヘッドランプの光のたまりがこちらへ向かってくるのが下の方に見える。1番近い明かりはすぐそこまで来ていていまにも追いつかれそうだ。あせる、あせる。一生懸命登るけれど5、6の科尔手前20分位の所で力尽きてしまいとうとう追いつかれてしまった。しょうがない、譲って先を行ってもらう事にするか。見るとガイド登山のパーティらしい。やばい、昨日と同じ目にあうかもしれない。5、6の科尔に到着し登攀準備を済ませて歩き出す。5峰はトコトコ登り、トコトコ下りた。前のパーティは4峰の登りでロープを使っている。それを見た本図さんの

『俺らも出すか』

の声で私達もロープを出しハーネスに結ぶ。

『登っていいぞ～』

の合図にまず吉田さんが登り、私が続く。左を巻くようなロープの流れに導かれるままに行く。本図さん曰く

『ロープを出す必要もなかったな。』

ここはこの1ピッチでロープをしまう。と、その時

『俺のシュリングは?』

『は?』

『ビレイ用に岩にかけてあったやつだよ。』

しまったー!!。昨日の懸垂用の残置シュリングが頭にこびりついていたのと前のパーティが使っていたものと色が一緒だったせいで、すっかり残置と思いこんでた。

『ごめんなさい、置いてきちやいました。』

『・・・』

その後しばらく言われたな～、反省、反省。ロープをしまった所からはトレースが2つあり、本図さんが偵察したところ稜通しのはあんまり良くなさそうなので岩の左を巻くようにして一旦下り、登り返して3、4の科尔に到着した。3、4の科尔はかなり広いところで何パーティかはここでビバークした様子でテントを撤収しているパーティもあった。朝、濁沢を出発してくるときにしめしめと思ったのだが、ここでビバークしているパーティがいるとは全く思いもよらなかった。まだまだ甘い。でもまあ、ガイドさん達のパーティが3峰に取り付き始めたし、私達の前はここでビバークした1パーティだけだし大丈夫だろう。ちょうど日の出の時だったので見入っていたら、なんと本図さんが

『あと1時間半はかかるぞ。』

と恐ろしい事をつぶやいた。どうして??聞いてみると『だってあいつら下手そうな顔してるじゃね～か』とのお言葉だ。そんな主観的な。そんな話をしてるうちにガイドさん達が全員抜けていった。次は本図さん曰く下手そうな顔をしている3人パーティだ。

『寒い、寒いよ～』。

『太陽は出てるけど、風は強いんだよ～。ここでビバークしたならなんでもっと早く取り付かないんだよ～。私の心の叫びだ。あれから1時間半、トップがようやく抜け、セカンドの1人が視界から消えたが最後の1人はまだ登り出してさえいない。当然、私達は1歩も動けない。後続パーティはぞくぞくとやってくる。私自信そんなえらそうなことが言えたものではないが、本図さん

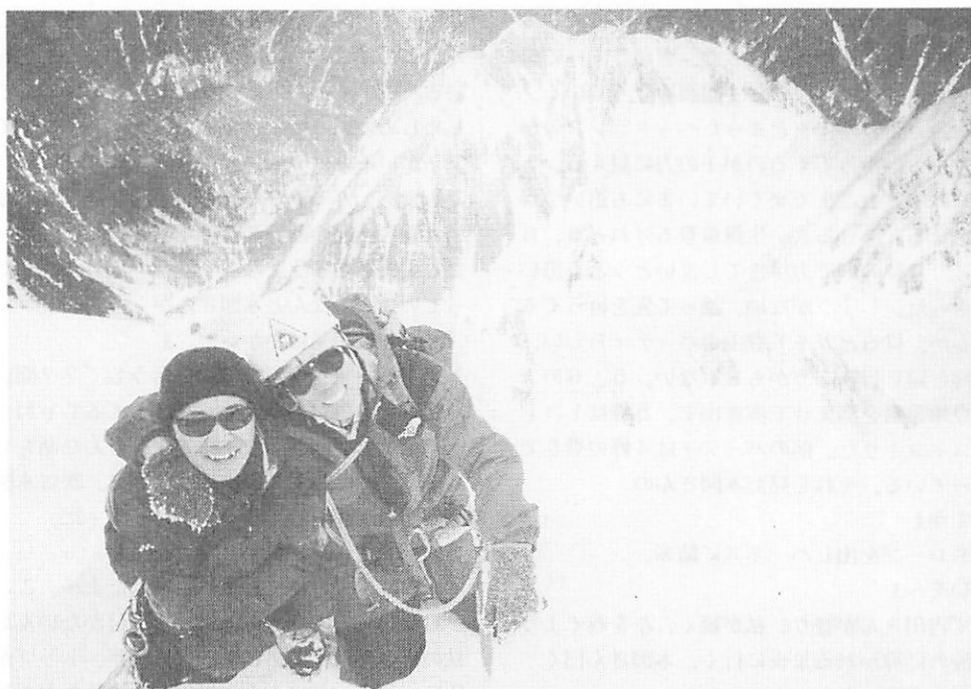
の言うとおりであった、まだまだ時間はかかりそう。・・・それからさらに30分、ようやく最後の1人が動き出すとしていたので私達はやっと取り付きへと進むことができた。たった10数歩に2時間以上、昨日と同じじゃないか！最後の1人が取り付きを離れると同時にビレイをセットし本図さんが登り出した。ロープはグングン伸びていく。前の人をどうやって追い越したんだろう、ロープはからまないんだろうか？。考える間もなくビレイ解除の合図がかかった。やっと動ける。今度は先の失敗もあるので私が先にいかせてもらおう。前のパーティが行っている凹角のさらに左にラインをとったんだ！快適、快適。前のラストの人は凹角のところでかたまっているらしく『悪いよぉ〜』と言いながら人間チョックストーンとなっていた。(わたしかなりひどいこと書いてる気がする、でもほんとにえらい目にあったんだもん！)前のパーティのロープをくぐり少し上でビッチをきっている所へいく。すぐに吉田さんもやってきた。2ビッチ目はチムニーを登る。クラックそばのフェイスが3ビッチ目。4ビッチ目はちょっとかぶったところを左から回り込んで3峰の頭にでた。ここでロープをたたんでとここ歩き前穂の頂上にでた。吹き付けていた風もいつしか

止んで空は快晴、最高の気分だ。ひとしきり頂上を満喫した後、奥明神沢を岳沢へ向かった。途中傾斜がきつい所があったので2回程ロープを出してもらった。

次の心配はACCJ一東京パーティのテントが見つかるかどうかだったのだが名雪さんがいつも携帯している軍艦旗がテントの上にはためいていたのでいらぬ心配だったようだ。東京のテントの隣は奇麗に整地してあるスペースがあり、その上に「ACCJお宿はこちらです」と書いた板が置いてあった。ありがたや〜。それでは、とツエルトを張っていたら東京のメンバーがテントに戻ってきた。本当は昨日が前穂の予定だったので、昨日は前穂の頂上まで私達を迎えに行ってくれたんだそう。ツエルトを張り終え、明日行く予定の岩岩尾根の取り付きまでトレースをつけた後、東京と茨城でひとしきり話の花を咲かせた。

潤沢(3:00)ー5, 6のコル(4:28)ー前穂高(9:40~10:34)
ー岳沢(12:52)

(渡辺 記)



前穂高北尾根での吉田、本図「もしかすると、この2人でできているのかも・・・？」

すいてはいたけれど（畳岩尾根）

2000. 5. 6

パーティ L 本図一統、吉田仁、渡辺聡子

ビバーク訓練と称してシュラフカバーのみの持参だったので岳沢での夜は時間がたつのがとても長く、一晩中潤沢に置いてあるシュラフとテントシューズに思いを馳せていた。どうやら吉田さんも眠れていないらしい。一方、本図さんは寝息をたてて熟睡しているようだ。さすが～。待ちに待った朝がやってきて食事を取り外に出てみると、予想に反してかなり暖かくそのせいか辺りはガスが立ちこめていた。ソーラーシステム型の私としてはまいちパワーが出てこない。だが、もし雨が降っていたら上高地から横尾経由で戻らなければならなかったのも、まあ、よしとするかな。東京の方々の見送りを受けてシュラフとテントシューズが待つ潤沢へと出発。気温が高いので雪がぐさぐさである、昨日つておいたトレースがとても役にたった。雪の状態が悪いのでもう少し沢をつめてから稜線に出ようという事になって今度は何も無い所を膝までもぐりながら（これはちょっとオーバー）歩き、左の支流に入った。暫く進むと「これ以上沢沿いに行くと上へ行き過ぎて面白味が無くなるから、この辺から稜線に出るか。」との言葉で沢とお別れをする。きつい傾斜も加わって、ぐさぐさの雪で踏んでも踏んでも安定しない足場におびえながら上へとすすむ。そのうちものすごい急傾斜のブッシュまじりの所が

現れた。これは絶対に上からお助け紐が下ろされるに違いないと思い少し待ってみるが、全然そんな気配はない。仕方が無いのでブッシュを掴みながらなんとか上へはい上がって見ると、何と本図さんが居ないではないか！！。中央アルプスの一件が頭を過ったが、今回はすぐ側に吉田さんがいてくれるので大丈夫。少し上で待っていた本図さんに合流し、その後急斜面をトラバースし、雪壁を登り、ほんのちょっと顔をだした岩に足をかけて進み、畳岩の頭に出た。

『なんで畳岩尾根を選んだんですか？？』と聞いた吉田さんへの答えは

『俺がまだ登っていないから。』だった。

稜線に出た頃、ときおり視界が開けるようになってきて西穂が見え隠れしていた。さあ、奥穂までもう一息だ。ジャンダルムは登らずに、下るがすっぱりと切れ落ちていた所をこわごわトラバース。ロバの耳は途中まで稜通し、その後クライムダウンと懸垂2回で下まで降りて、登り返して稜線に戻った。ナイフエッジの所はしっかりした踏み跡がついて、とことこ歩き、奥穂の頂上へ立った。穂高岳山荘に着いた頃にはガスはすっかり消えていい天気、気分は最高である。しばらく腰をおろした後、ザイデングラードを途中からはシリセードでくだり、木



奥穂高頂上にて・・渡辺、本図

村さん、中島さんが待つテントへと辿り着いた。今日は特別だ！。飲んじゃえーということでみんなで乾杯。この晩はあったかいテントでゆっくりと寝る事が出来た。

今日は杓岩尾根に取り付いてから稜線に出るまで誰も会わなかった。昨日、一昨日のような事はなかったけれど、杓はもうご勘弁、かな。

岳沢(4:21)―杓岩の頭(9:04)―奥穂岳(11:21)―
涸沢(13:35)

(渡辺 記)

下山日

2000. 5. 7

パーティ L 本図一統、木村一、中島淳、吉田仁、渡辺聡子

楽しい連休も今日でおしまいだ。雨が落ちてこないうちにとっとと撤収作業にかかり、出発。木村さん、中島さんはスキーをはいてあっと言う間に視界から消えてしまった。入山の時はありんこの行列だったのに、今は私達だけだ。どうやら休みを目一杯使って遊ぼうと考えるのは小人数らしい。ひとまず横尾に到着しデポして置いたズックに履き替える。雪も5日間でかなり溶けていて来た時よりも歩きやすい。下山していく人達をグングン追い越し、明神で山スキー組と合流。時折雨がばらつい

たものの、ひどく降られることなく上高地に到着する事が出来た。タクシー1台に乗り込み、沢渡で滝谷パーティと合流し、温泉でゆっくり汗を流し戻ってきた。帰りは渋滞に巻き込まれることなく下館に着き解散となった。

(渡辺 記)

穂高涸沢 山スキー

2000. 5. 3~7

パーティ L 木村一、中島淳

上高地に来るのは何年振りか……。1979年の冬合宿で前穂高北尾根を攀じて以来だから21年振りの穂高との再会になる。大正池湖畔から望む穂高の稜線は前日に降った雪を被り冬の様相である。今回の5月合宿は滝谷登攀に2名(別行動)、前穂北尾根&北穂東稜&岳沢登攀に3名、涸沢スキー組の2名の総勢7名のメンバーである。上高地からザックにスキー板&スキー兼用靴を付けると、ザックの重さが肩に食い込み最初の後悔。スキー組の木村・中島の2名は徐々に遅れ気味なり、横尾橋を渡った所からスキーを履きシールを着けての登高に変更。今年は雪が多く本谷橋は雪の下、涸沢は更に遠く遥かかなたに感じられる。見覚えのある雪の台地が見えてからも更に1時間近く登り、先行パーティに遅れること約1時間でやっとベースキャンプ地の涸沢に到着。

既にテントは先行パーティにより設営されていたので、ザックを下ろして後続の中島氏を迎えに少し下る。翌、5月4日北穂東稜パーティに遅れること1時間後に我々スキーパーティはテントを出発したが、北穂沢の登りは思ったよりキツイ。涸沢を遅く出発したにも関わらず北穂沢の登路は登山者の列で数珠つなぎ状態。小休止を数回繰り返しながら北穂沢を登ると上部からスキーヤー2名が滑降してきたので

『どこから滑ったのですか?』

と聞くと

『北穂の頂上に山岳警備隊の方がいて雪崩を誘発する可能性があるの下から滑ってくださいと言うので、あの岩の下からの滑り出しです』

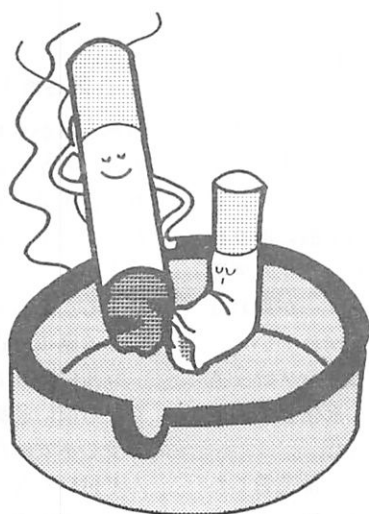
と言う。我々も仕方ないので目印の岩を目指して登高開始。目標の岩に着いて東稜を見ると大混雑。ゴジラの背手前の岩場に先頭パーティがヘバリ付いて20分以上も動いていない様子だ。そのうちすぐ下の雪面に落下したが、先行パーティがあの状態では先が思いやられる。我々は東稜パーティの視線を感じながら北穂沢の滑降開始。スタート直後中島氏が頭から大転倒、すかさず東稜から大歓声上がる。前々日降った新雪が積もりスキーが思うように回転しないが、中島氏はジャンプターンを決めて快適に滑っている。スキーでの下降はあっと言う間に涸沢に着いてしまった。涸沢のテントから東稜を見るとゴジラの背手前に15人~17人が確認できるが、東稜パーティが下山するまでは3時間以上掛かる様子である。テントに入りビールで乾杯をしてうたた寝をしていたら、テントの外に東稜パーティの声が聞こえる。やはり3時間以上の時間待ちとの事。

翌日、北尾根パーティは夜の明け切らない中をヘッド

ランプを頼りに出発。我々スキー隊は8時出発。ザイテングラードを久し振りに登るが、ザイテングラードはこんなに登りがきつかった？と思いながら小休止を繰り返しながら、昨日はスキーを担いで登ったのに懲りて、今日はスキーを引っ張りながらの登高。5月の潤沢には様々なパーティが入山しており、明らかに遭難予備軍と思わしきパーティも見かける。ビッケル&アイゼンも持っていない上に、ストック1本で尻びり腰で下山する姿を見るとこちらまで恐ろしくなってしまう無事を祈らずにはいられない。途中、小休止中に直登ルンゼを見るとスキーヤーがジャンプターンで滑ってくるではないか！。奥穂高岳頂上からの滑降に違いない。我々はやっとの思いで奥穂小屋まで登り、ここで滑降の準備をして中島氏が小豆沢に飛び込んだ。数ターン順調に滑り出したが、そのうち中島氏の足元から雪崩が発生。雪崩が滑っていく下には登山者の列があり、中島氏は真っ青になったらしい。それを上部で見えていたのでザイテングラードの左側を滑ることにし、スキーをつけて滑降を開始するが雪が重いのでスキーが滑らない。しかし潤沢の大斜面を1人占めとはなんと贅沢な事か！！。自分の技術に合わせた大回りターンでザイテングラードの末端を回り込みテントを目指す、下の方は雪が腐っていて思うように回転しない。テントに着き、冷たいビールで乾杯し明日の行動をどうするか相談するが、明日は雪が腐る前に滑ろ

うとすることで、朝早く北尾根の5・6のCOLからの滑降に決定。今夜はこのテントの中に2人ぼっきりで寂しい限りだ。翌朝、6時半に出発。北尾根側は太陽の陽がささず雪を締まっているので快適な滑降が出来そうである。中島氏は5・6のCOLから木村は100m手前からの滑降開始。ここから見るザイテングラードはかなりの急斜面に見える。対岸から見るとここ5・6のCOLも急斜面に見える事だろう。ザイテングラードの中間部で事故があったらしくヘリコプターが飛んでいる。後ほど潤沢小屋で確認したところ中高年登山者が滑落して足を負傷してヘリコプターで救助されたとの事。昨日心配していたことが本当になってしまったらしい。我々スキー隊は快適な滑降で20分程でテント着。まだ9時前なのでどこかに行こうと思えば出来るが、本日の行動はこれで打ち切りビールを買い込み停滞を決め込む。岳沢に行っていたパーティが夕方帰ってきたので今夜は賑やかな夜になりそうな予感、合宿の成功を祝って夜は祝宴。翌日はテントを撤収し、再び重いザックを背負い潤沢を後にするが、ザックが重いので思うようにはスキーが回転しない、しかし、スキーでの下降は早く1時間弱で横尾着。ここからはスキーをザックに付けて上高地までの難行。

(木村 記)



滝谷・四尾根主稜

2000. 5. 4~7

パーティ L 古山正文、笹平孝

春合宿は、始めて参加する事になった。新穂高ロープウェイの下にある村営駐車場に車を止めた。翌日は、天気予報だと雨の確率が高いので、停滞する事にした。暇なので、近くの温泉に入ったりした。

5/4

朝の5時に出発。白出沢出合から長く感じる。天気が良いので、滝谷出合に着く頃はだいぶ暑くなっていた。滝谷の壁は真っ白で、5月とは思えないくらいだった。ここで30分ほど悩んだ結果、気温が高いので停滞する事にした。まだ朝の9時頃だったので、のんびり焚き火をしながら時間をつぶした。避難小屋が気になっていたもので、覗いて見ると意外と綺麗で驚いた。おまけに暖炉まである。既に対岸の所にツェルトを張っていたけれど、小屋に移動した。暖炉に木をくべて火を着けても、暖かい空気が煙突から逃げて行くので、小屋の中は暖まらなかった。遠赤外線暖まる物だった。明日は早いので20時ごろに就寝すると、ガタガタと音がして二人組みのパーティが入ってきた。話を聞いてみると、四尾根に入ったがかなり悪いらしく、18時ごろツルムのコルから降りて来たと言っていた。

5/5

ヘッドランプを付けて出発。滝は完全に埋まっていたので、急な雪壁を登って行く。落ちたら止まりそうもないので、慎重に登る。すぐにデブリ地帯になり、登りにくくなる。明るくなった頃に合流点に着く。上部の壁に日が当たると、ベルグラが剥がれ落ちたやつが次々と襲ってくる。C沢右俣に入るとスノーコルは埋まっていた、夏の面影は全く無かった。適当な所から四尾根に取り付く。岩は、ベルグラと雪に覆われていて、バイルで叩き割ったり効かせたりして、あまりランナーが取れない状態が続く。Bカンテからは、両側が切れていて、傾斜が急な所には雪が無く緊張した。Cカンテは、A0で強引に登って行く。次のルンゼは、氷化していて登りやすいが、上部になると結構辛かった。

次のツルムに上がる最後のピッチは、一番苦労した所だった。フェースには、薄いベルグラが覆っていて、すぐ崩れ落ちてしまう。フェースと右側の壁との間には、指が入るほどのクラックが上に向かっていて、中の雪を掃除してフレンスをセットした。古山さんに



滝谷第4尾根…Dカンテの登攀

『落ちるかも』

と言ってから登り出す。ホールドの無いフェースに、とりあえずアイゼンの爪を突き立てて、じりじりと這い上がった。そして、もう一つフレンスをセットしてまた這い上がる。こんな調子で登るとハーケンの所に着き一安心する。そして、左にトラバース気味に行くと、コルに降りる懸垂支点に出る。

コルに降りてからは、あと二ピッチルートがある。暗くなる前に稜線に出たい。あと何時間かかるんだろう、と少し不安になる。次のピッチは、垂直の壁で雪がほとんど付いてないので、だいぶ楽になってきた。上部のチムニーの所で、ボルト一本打ち足した。

Dカンテは、途中で大きい岩が出てきて、ここを這い上がるのに苦労した。雪を落としてホールドを探したが無かったので、不安定な雪に、バイルを軽く差して這い

上がった。上部の被り気味のカンテもかなり怖かった。

終了点から稜線までスタカットで行った。稜線からは、滝谷出合が良く見えて、そのスケールの大きさは、充実感の大きさでもあった。ここから少し行くと潤沢のコルに着く。斜面を切って、ここでビバークした。翌日は、西尾根経由で新穂高に降りた。

5/4

新穂高温泉(5:00)ー滝谷出合(ビバーク)(8:30)

5/5

滝谷出合(3:00)ーB沢合流点(5:00)ー取り付き(6:40)ー

ツルムのコル(14:20)ー稜線(18:00)ー潤沢のコル(ビバーク)(18:30)

5/6

潤沢のコル(8:00)ー潤沢岳西尾根(8:40)ー潤沢岳西尾根2000m地点(10:30)ー白出沢出合(12:40)ー新穂高温泉(13:40)

(笹平 記)

尾瀬・燧ヶ岳・山スキー

2000. 5. 21

パーティ L 木村一、松原丈男、吉田信一

降りしきる雨の中、集合場所に向かうも本当にこの雨が上がるのか？不安で一杯です。吉田氏の豪華マンションには既に松原氏が来ており、ビールを飲んでいるではないか。

『雨が上がりなかつたら山菜採りでもやろうや』

との一言で行くことに決定した。東北道を降りる頃には雨は止み、松枝岐の沼山峠に着く頃には雲の切れ間も見えるようになってきた。ここ沼山峠の駐車場には雪がまだ3m以上残っており、今年の雪の多さを物語っている。朝になると空には太陽も顔を覗かせており、サングラスを忘れたことを後悔した。沼山峠からは夏道沿いに登るがスタートから間違っしまい、御池田代の方へ入り込んでしまった。途中から引き返し正規ルートに入るが前途多難なスタートになってしまった。ブナ林の中の急斜面を登ると広沢田代らしき所に出るが今年は雪の下である。ここで小休止後、目の前の急斜面を下りはどこを滑降しようかと考えながら登り、更に少し下ると熊沢田代に出るがここも雪の原。この頃より霧が濃くなりルートが判然としないので、下山時の事を考えて熊沢田代は右側を登る。今日は、雪が締まっているのでスキーを紐で引っ張りながらのツボ足登高。ここ熊沢田代からは天気が良い時には燧ヶ岳の全容が望まれ絶景のところらしいが、今日は10m先は濃い霧の中。更に上部の樹林帯を登るが下降時は要注意の場所だ。数年前、平ヶ岳に登って下降時にテントに帰りつかなかった例もあるので、濃霧時樹林帯のスキー滑降は要注意である。この樹林帯を抜けると広い雪の斜面に出て、これを左斜上気味に登り、更にルンゼ状の雪の斜面を登っている時に雪崩の音がしたので一瞬身構えたが次の音で雷鳴と判った。山での雷は大嫌いだ。若かりし頃穂高岳の稜線でビバーク中に雷に遭遇して以来、山では雷が嫌いになってしまった。先を急ぎ一刻も早く頂上に着きたいと思いながら登高を続

けるとヒョイと頂上に出てしまった。空からは大粒の雪が舞い始め遠くでは雷鳴が鳴り響いているので長居は無用。写真を撮り、早々に滑降の準備開始、松原氏は笑っているが雷は怖いので仕方が無い。霧で視界が悪いので登ったトレースを外さないように慎重に滑降するが、左にトラバースする地点で下降ルートを見失ってしまった。左に見える小尾根に上がって先を見ると見覚えの無い景色！！。かなり左に寄ってしまったらしい。少し戻ると下から吉田氏が登ってくるのと遭遇、この濃い霧の中ではすれ違いが心配だったがこれで安心。吉田氏に

『頂上へ行くの？』

と尋ねると

『いや一緒に下る』

との事。樹林帯の中をトレースを頼りに滑り、熊沢田代もトレースを外さないように滑り、更に少し登った所で大休止。程なく朝から我々と前後して登っていた福島県から来たパーティと一緒にコーヒーをご馳走になったが、持っていた装備にはビックリ。大きなコンロと大きな手提げ鍋でコーヒーを沸かしてくれた。休憩中突然霧がなくなり、燧ヶ岳の山頂が見えるようになってきた。やはり燧ヶ岳は素晴らしい山であり、濃霧の中を滑ったのが勿体なかった。福島パーティにコーヒーのお礼を述べ、直下の急斜面を快適に滑降。今日は雪質が良いのでスキーが上手になったようだ。ジャンプターンも決まり、雪質が良いところも違うのかと感心しきりである。最後は樹林帯が濃くなるが快適な滑降で沼山峠の駐車場着12時30分。山菜を採る予定でしたがこの雪では採れそうもないので、温泉に入り一路茨城へ

(木村 記)

縫道石山

2000. 5. 27~29

パーティ L 本図一統、渡辺聡子、生井一男、他2名

『5月の末に縫道石山に行きませんか？、一緒に行っていたら心強いのですが、ご考慮ください』という山行のお誘いのメールが渡辺お嬢様から送られてきた。

メールを読んで思わず、ほくそ笑んでしまったが、どうもげせない？。なぜ、俺を誘ってくるのか？。うん～ん、そういえば以前、本図さんからメールで下北半島にある縫道石山に行かないかと、それらしき打診があったなあ……。『はっは～ん、そうか！。そうきましたか、本図さん。私をどうにか引き込もうという魂胆だな』と思ったのだが、元来、女に弱い私めは、まんまと某M氏の術中にはまってしまったのであった（悔しいが、彼は私の行動パターンを十分に把握している）。

この山行に関しては始めは登山形態、日程も分からず、単に土日の休暇で尾根歩きかなと思っていたのであっさりとして受けてしまったのだが、本図さんからのメールの連絡で休暇を1日取る事。メンバーも2名は会外の人という事。そして登攀である事。が、わかった。私はチョット気に入らなかった。登攀するのは良いのだが、面識もない人とザイルを組むのは私としては不安で一杯である。本図氏、渡辺女史と一緒に山にも行ってる知り合い（関口氏、木崎嬢）なのだから十分に知っているだろうが、私は初対面である。そんな急ごしらえのパーティでいきなり登攀をしようなんて私には出来ない。お互いの登攀力を知り、またお互いの意思の疎通が無いと登攀をしても何も面白くはないと思う。私は昔の古い考えの無器用なクライマーかも知れない。そんな事で、メールで本図氏にクレームをつけると、その回答がメールで送られてきた。まずは、三ツ峠にて縫道石山チームのメンバーだけで登攀訓練をし、各々の登攀力を見極め、もし納得できないようだったらその人には山行を諦めてもらうと言う事。その後、谷川岳の南稜を登攀してから縫道石山にアタックしようと言う事であった。それらを読んで少しは納得し、まあ、いいだろうと今回は参加することにした（誘ってもらってなんて横柄な奴だなと、思う人もいるだろうが、譲れないものは譲れないだけである）。

後日、三ツ峠訓練山行が行なわれ、今回の縫道石山登攀隊のメンバーは誰も登攀レベルはボーダーラインを越えていると判断が出され、これであれば南稜を登攀しなくても大丈夫だろうと言うことになった（南稜の計画はあったのだが、日程があわず実際には実行には至らなかった）。

いよいよ、今日は縫道石山決行日。夜、土浦の協同病院の駐車場に集合し、いよいよ遙か遠く、とおくの下北

半島まで長距離ドライブである。約10～12時間に到着するだろうとの事で、一人あたり2時間から2時間半の運転で着くので交代で運転していく。途中、高速では長距離トラックとバトルを繰り返しながら東北道をひたすら北を目指す。

高速を降り、下北半島の海岸線の道を行く頃はすっかり夜も明け太陽がまぶしかった。地図とにらめっこをしながら縫道石山の入り口を探しながら行く。途中一回入り口の道を間違えて引き返すも思ったより早く登山口に着いた。午前7時過ぎ到着。

準備仕度を済ませ、いらぬものは車に残し早速、縫道石にアタックである。今日はまずは西稜を登る。登山道入り口から30分ぐらい登った時の事である。先頭は本図さん、その後を生井、渡辺、木崎、関口と隊を成し進んでいくと、

『あ、くま～』

とぼそっと左の斜面の上を差しながら木崎さんが声を発した。

『なに？悪魔？？あくま？あ、熊ね』

とその方向を見ると熊が一目散にこちらにめがけて走ってくるのではない。私の方向へ真っ直ぐに駆け下っている。一瞬、逃げなくちゃと思ったのだが、私は小さい頃から動物が好きで、捕食動物から体を背にして逃げたいいけない事を知っていたので、逃げないで熊の動向を見続けた。しかし、他の4名は私の『逃げちゃだめだ！』の声もむなしく15m以上は下の方へ逃げていってしまった。私だけ動かないで熊がどう来るか見届けていた。頭の中では、私を目がけてきていても必ず私が動かなければ（逃げなければ）、私の1m位前で止まると思っていたので、恐かったが熊から目を外さず、闘気をその熊に投げかけていた。これは以前ドーベルマンと死闘？？をした時に身に付いたもので、やつらに気合いで負けていけない。決して彼らに背中を見せてはいけない。出会い頭ではない限り、ガンをつけていれば、うかつには攻撃してこない。と、いう事は身をもって知っていた。すると熊は私の1m手前を横切って下の方へ走っていった。助かった。やっぱり私の闘気をあの熊は感じたのだろう。ともかく危機は回避されたのであった。

『びっくりしたなあ、熊はどうした？』

『皆さんに熊もびっくりして下の方へ逃げていって仕舞いました』

『すごかったなあ、でも、大人の熊にしては小さかったから小熊じゃないの？』



縫道石山山頂にて…渡辺、木崎

『小熊だったので、工事の音であわてては逃げてきたところに私たちと遭遇したんじゃないのかな』

『そうそう、おかあさん、怖いよ～、人間だよ～。て必死で逃げていたので私たちには目もくれなかったんじゃないかな』

『でも、あの熊も早かったけど、本当に逃げ足は皆さん早いんだから～、逃げちゃダメと言ったのに～』

と、危機的遭遇事件も何もなければ、暫しその話題で盛り上がり、熊談義にのめり込む縫道石山登攀隊一行であった。これで、縫道石山登攀隊員の俊敏な動きは把握できた。あの逃げ足の早かった事。特に某氏は早かった。先頭にいたのに逃げた時も一番遠い距離にいたような・・？。ともかく近くには母熊がいるだろうからと登山口まで戻って様子を見る事となった。

一時間ぐらいてからもう大丈夫だろうと、もう一度アタックに向かう。今度はどこにも熊の気配はなくブッシュの中、取り付きに着いた。

今回のクライムオーダーは本図、木崎、渡辺。生井、関口の2パーティに分かれて登る。

まずは、本図さんがトップで行く。半分木登り、ブッシュ登りで岩に取り付き登っていく。この木登り&ブッシュ登りがいやらしい。岩に取り付いてからも一歩足が上からず、ちょっと難しいムーブを強いられた。その後、数ピッチは木登り、ブッシュ登り、岩登りモドキが続き、下の方はほとんど藪こぎで、頭の中ももうろうとしてきて岩登りをやっているというよりも何だか？川口浩の〇〇探検隊の様な感じになってきた。(川口浩探検隊なんて知らないだろうなあ。これを知っている人はかなり人

生経験が長い人である)。

もうろうとした頭の中では、テレビで見ていたような幻覚が見えてきた。

『本図隊長！。状況はどうですか～。例のものは発見できましたか。どうぞ。』

『こちら前線。今のところ何もありません。んん、あれは何だ！。うわ～。でた～、大変だあ、エマンジェシー、今、渡辺隊員が襲われました。本図隊長と木崎隊員は幻の獣チェンドンを追って森に入っていました。どうぞ』

『ああ、渡辺隊員は大丈夫ですか～？。どうぞ』

『渡辺隊員は大丈夫です。傷は浅いです。どうぞ』

『我々もすぐに合流します。本図隊長、木崎隊員とも無理はしないように！。くれぐれも深追いはしないように！。我々が到着するまで動かないで…。どうぞ～』

といった光景が・・・。それほど藪こぎ登攀は精神を浸食してくるのであった。心身ともにボロボロになりつつありながらも、ようやく視界が開けてきた。乾いた岩のすっきりした登攀が出来そうな雰囲気である。これが私が求めていた登攀である。頂のスカイラインが奇麗に見える。それに向かったのクライミング。下部のクライミングとは違い快適な登攀が出来た。こんなルートだったら何時でも登ってみたいと思う。がしかし、最終ピッチのクラックの取り付きに行く途中で、またまた、木登り、藪こぎがあり、ここが今回の一番の核心であったと感じた。ザイルは木に引っかかるは、ザイルは重い、木が邪魔で体が上に登れないは、『ああ、まったく、こん畜生！』と半狂乱になりながらも、先行パーティ(本図、渡辺、木崎)の所へ到着した。

到着後すぐにビレー体制に入り、関口氏にコールをし、上がってもらう。その間に木崎、渡辺両女史がクラックを華麗に登っていく。何やらブツブツ言いながら登ってはいるが、なかなか華麗な登り方である。流石はフリークライミングで慣らしているだけはある。これでは私の出る幕はないようである。

ここのクラックは結構面白かった。大股を開きながらガンガン登っていけるので楽しい。そのクラックを乗り越すと3級程度の登りで頂上に飛び出した。頂上ではザイルをたたんでくつろいでいる本図氏、渡辺、木崎両女史がいた。シンガリを努めてくれた関口さんを引き上げ、頂上に全員集合。後は登山道を通して登山口の車まで戻った。

この日の夕食は、渡辺シェフの腕前を堪能した。なかでも鳥の丸焼き（詰めもの）。これのは驚いた。私はテレビでは見たことがあるが、実際にここ、雑道石山に来て食べられるとは、それだけでもこの山行に参加して良かったと思った。

楽しい夕食も終え、就寝の時間になった。我々男3人は、タープの下で就寝し、女達はいやもとい、おねえさま達はデリカの中御就寝した。

夜になって雨がひどくなり、タープの屋根は雨水で大

きく沈み込んでいた。就寝中、数回起きては支柱を上へ上げ雨水を落としていたのだが、その支柱がいきなり倒れ、寝込んでいた本図氏を直撃。その後タープの修復作業等で大変な夜を過ごした。

次の日は、朝から雨が降りだして登攀は出来ず、停滞になった。釣竿を持参してきた本図、渡辺は近くに釣りをしに行ったが、我々3人は一日中酒を飲んだり、暇を持て余していた。

その次の日も天気は悪く、仕方ないので近くの温泉に入って、また遠い、とおおい茨城に向け、車を走らせた。

とにかく、遠い、とおおい山域なので、今後、滅多に行く事はないと思う。初回で、初日を除いて3日間ただ暇にしまったので（天候が悪かった）、よけいにそんな思いがしてしまうのかも……。しかしいろいろな体験（熊と遭遇、鳥の丸焼き）が出来たことは、良かったかなと思った。

5月27日

駐車場(8:49)ー西稜取り付き(10:50)

(生井 記)

谷川岳・一の倉沢衝立岩雲稜第2ルート

2000. 6. 4

パーティ L 古山正文、笹平孝、生井一男

『シーズン初めの登攀は衝立岩にしよう!』というキャッチフレーズに魅せられてここ、谷川岳一の倉沢に来てしまいました。古山さんも私の弱い所をせめてきて、つついその気にさせられちゃいます。

最初に知り合った頃から古山さんは私をやたら『師匠〜!。頼みますよ、師匠〜!』

と、何かにつけ『師匠〜』と連呼するので、私もすっかりその気になって、俗にいう〇〇もおだてりゃ、木に登る!状態になってしまう。根が単純な私は、いつも彼のおだてに乗ってしまい“紅の豚”になってしまいますです、はい。そんな訳で彼とは色々つけたいな所に行った記憶がある。また、いろいろな体験も、今だから笑える話も……。そして今回も

『師匠。シーズン初めの登攀を衝立岩に行きましょうよ〜、ね〜、師匠。頼みますよう』

と、いう古山さんのおだてにすっかりのって、“神輿の上の紅のブタ”になって今ここの倉沢出合の駐車場に来てしまった。そして「やっぱ、俺って学習能力が無いブタだな」と反省と後悔の念に頭を痛めるのであった。

この荒野の3匹（古山、笹平、生井）は、去年の暮れよりパートナーシップも発押され、中央カンテ冬期登攀

偵察。冬期南稜登攀。北ア・硫黄尾根。と山行を重ねてきた。その勢いで今度は衝立岩に行こうとなったのだが、ルートの選考で私（生井）と古山アンド笹平とで意見が分かれてしまった。

古山・『本チャン初日（シーズン初）だからダイレクトカンテならトップを引きますよ。でも雲稜じゃ、ちょっとねえ〜、ダイレクトカンテなら空いてますよ』

生井…『なに、ダイレクトより雲稜第2の方が空いるよ、俺にダイレクトカンテを何回登らせるの〜、3回目だよ、頼むよ〜』

古山・『雲稜じゃ、ちょっとトップは引けませんよ、ダイレクトなら喜んでいきます。ダイレクトにしましょうよ』

と、テールリッジを登りながらもルートが決まらずにとうとう中央稜の基部にまでたどり着いてしまった。基部からダイレクトカンテを見ると先行パーティがいた。雲稜第1にも先行パーティがいたが、雲稜第2を見ると誰も取り付いていない。やっぱり雲稜第2に行くしかないでしょう。

まずは、私、生井が切り込み隊長で雲稜第2に取り付くことになった。取り付きまでザイルを引っ張って行き、

1ピッチ目は、傾斜の強いフェースだ。微妙なバランスが要求されるが、出だしで一発アブミをかけ、後はフリーで行く。昔とったきねずかか？細かいホールドだが、体が剥がれずに面白いぐらいに体が上に上がっていく。そのままほぼ直登気味に登ってビレー点に到着。『ビレー解除！』のコールをすると、難なく2人も登ってきて合流。2ピッチ目も私が行く。出だしのフェースは垂直に近いが、フリーで右上出来る。頭上のハング右側の突き出た岩を目指し、途中から人工に移行する。フェースに連打されたリングボルトに導かれるように突き出た岩を回り込むと、2人がどうにか立てる窮屈なレッジに着いた。

3ピッチ目も生井がリードしていく（暗黙の了解と言うか、私が言い出した事なので責任を取って最後までリードしていく）。凹状をなした垂直の壁を行く。左のフェースにはリスが走りビトンがべた打ちになっている。A1のアブミの駆け替えで大ハングの下まで直上する。ここまでは、何の問題もなくリードしてきたのだが、大ハングの乗っ越しで悪魔のささやきが聞こえてきた。下から見た時は何だこんなハング楽勝だなと一人思っていたのだけど、いざここにたどり着き張り出しをアブミの掛け替えで半ば鼻歌混じりで登っていき、さあ、大ハングの乗っ越しと腕を上伸ばしリングボルトを見ると、あちゃ〜？X、リングボルトのリングがないじゃあ〜ありませんか。思わず私は松田優作じゃないけど『何じゃ〜、こりゃ〜！』

と叫んでしまいました。3ミリのシュリングは古山さんに下でもらっていたのだが、さっき使ってしまったので無い。さあ困った。ハングの底でぶら下がったまま、どうにかその上のリングボルトまで（だいたい伸び切ったリングだったが）届かないか色々な体制でトライしたが、如何せん身長が足りない。かなり体力も消耗してきて、もうここから降りるしかないかなと思って下の2人を見ると、下の二人から

『生井さん。ガンバ〜！、ガンバ〜！』

のコールがかかる。すぐ下にいる2人が私を見上げているのが見えた。その下は衝立スラブとテールリッジが見え、『恐いよ〜頼むよ、交代してよぉ〜』と叫びたくなる高度感である。

ふっとザックの中に、難道石山へ行ったとき本図さんからナッツ一式を預かっていたのを思い出した。ハングにぶら下がったままザックからナッツの小さいサイズのを3ぐらい選び出し、乗っ越しのリングの無いボルトの頭だけになったボルトに通しそれにアブミを掛け、どうにかハングを乗っ越した。助かった。流石本図さん。こうなることを予見して私にナッツ一式を預けておいてくれたのかな。感謝！。感謝！。ハングの出口でだいたい体力を消耗してしまったが、あとは垂壁をA1の掛け替えで難なく登る。が、最後にまたまた悪魔のささやきが

聞こえた。もう少しでビレーポイントに出る最後のボルトには2ミリのたぶんケブラーか何かと3ミリのシュリングがリングの無くなっているボルトに通してあった。

『これに掛けるしかないのか？。多分ケブラー系の繊維の上に被覆されたものだよな〜？。しかしこれを使うしかないよな、ええい、男は度胸。ナムサン』と独言を言いながらその2ミリのシュリング？というものにアブミを掛け、慎重にそして素早くその上のボルトにアブミを掛け替えていった。3ミリのシュリングは乗り替える時にブッチッと切れてしまった。が、どうにか2ミリのケブラーの物は切れずにもちこたえてくれた。冷や冷やしながら不安定なビレーポイントのたどり着いた。レッジはあるが不安定な為アブミ・ビレーになる。早速、

『ビレー解除！。登ってきていいですよ。』

とコールをかける。古山さん、笹平の順に登ってきた。笹平がたどり着き、もう少しでセルフビレーを取ろうとした時、ハーケンが折れて落ちてしまった。しかし1〜2メートル位の墜落ですんだ。体はどれも打ってないようだ。このルートは、ボルトは殆どリングが無い、伸び切っている、ハーケンが古いのは油断は出来ない。気を引き締めて4ピッチ目をいこうとした時、掛けたアブミのハーケンが抜け今度は私が2〜3メートル落ちて、瞬間無重力をあげわった。私もどこも打たなかったので、「こん畜生」と壁を蹴飛ばし、そのままトップで逆肩のフェースをA1のアブミの掛け替えで直上し、狭いが安定したレッジでビレー。

5ピッチ目。更にフェースをA1の人工で直上。20メートル位で木の生えている安定したテラスに着いた。

時間的に（午後5時になっていたと思う）もうここからエスケープしないとダメだと判断。2人がテラスに登ってきて合流後、撤退することに決まった。北稜に出るまで迷ったが、出てからは脱兎のごとく下降し、略奪点から下は樹林帯に入り、途中より衝立前沢に降り暗闇の中、出合に到着した。到着後時計を見ると、午後10時を過ぎていた。

思いのほか大登攀になってしまった。が、3人とも満足の登攀が出来たという顔をしていた。たまにはこんな緊張の連続の登攀も楽しいものである（無事帰還できたから思うのだけれど……）。

（生井 記）

奥多摩・入川谷

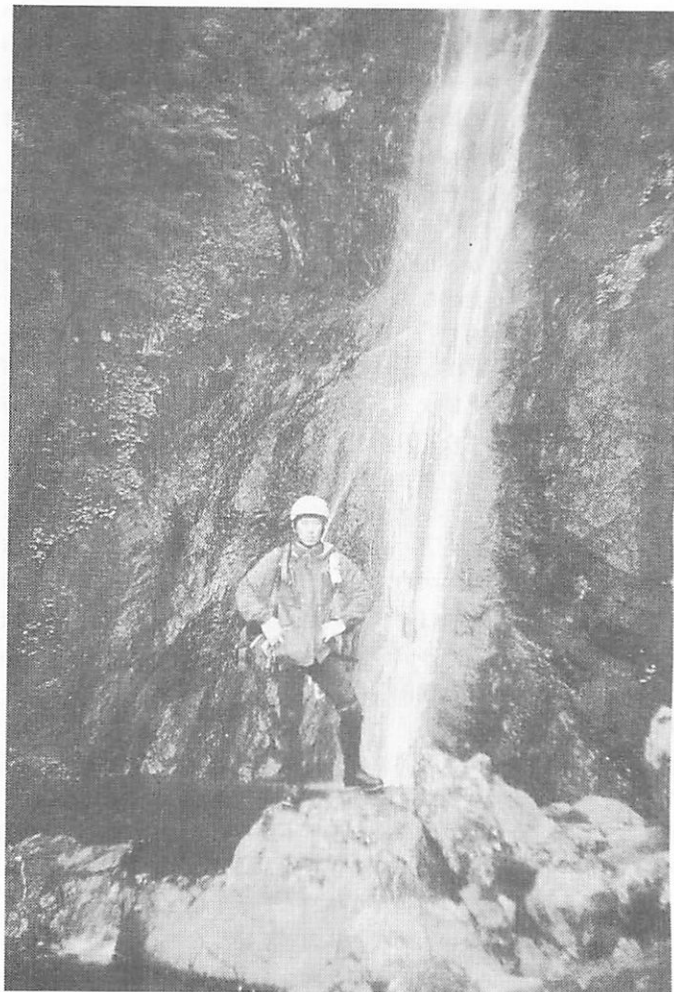
2000. 6. 4

パーティ L 本園一統、吉田仁

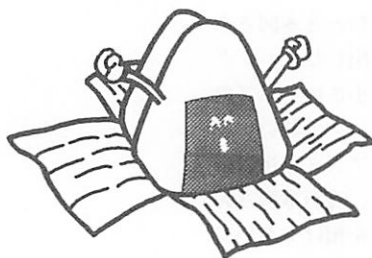
今年最初の沢登りは、奥多摩の入川谷に決まった。林道の終点に、車をとめてビールを飲んでいると雨が降ってきた。雨は、朝方まで降り続いたけど出発する頃には、青空が覗いてきた。

林道の先の広場から入沢。すぐにトバの倉骨と言うゴルジュになる。ゴルジュの中はとても暗くてスタンスが、良く見えない。慎重に通過する。その先は水のない、河原になった。水が出てきたところで右の枝沢に入る。布滝沢だ。ここをつめて仕事道を左に行く。そしてタマタカ沢を下降して本流に戻る。すぐに速滝に出た。直登は、無理なので左の快適なスラブを登る。その先は平凡になり、仕事道に出て終了。おとなしく一般道を下るが、途中で気が変わり沢に降りる。オキの倉骨を下降して車に戻った。時間も早いので、御岳ボルダーによってみたが、ロックアスリートの姿は、なかった。残念！

(吉田 記)



入川谷速滝にて…でも登れない…



阿武隈川白水沢講習会

(熊はもうたくさん巻)

2000. 6. 10~11

パーティ木村一、本園一統、ほか茨城労山会員20名

この山行は、茨城県勤労者山岳連盟理事長の大月氏から

『茨城労山でも沢登りを定着させたいのだが、茨城労山では経験者が少ないので、まず講習会を開きたいと思っている。ついては私に沢登りの講師をお願いしたい』

との依頼があり、開催することになったものである。

いざ講習生を募ってみると、理事長の予想よりはるかに多くの申し込みがあったとのこと。なんと5つのクラブから20名もあったという。私一人で20名は面倒見られないので、もう一人講師をつけてくれるよう大月氏に申し入れたところ、OKの返事があったので早速木村君をお願いすることにした。

前夜、甲子温泉の民宿に集合し机上講習を行う。講習生に聞いてみると経験者が数名おり、中でも経験豊富な者が2名いたので、その方にもリーダーをお願いして4つの班に分けることにした。机上講習は、皆さん熱心に聞いてくれて有意義なものであった。話はダニから熊のことまで及び、勉強会は夜半まで続いた。遠くは東京はおろか広島から来た方もおられて驚きもした。

明けて実技当日は朝から雨だったが、皆さん誰一人

として中止を発言する者はなく、淡々と準備は進められていった。

『この雨の中登るのはいやだなあ』

と思ったが、皆さんの意気込みがひしひしと感じられ『ようし頑張って登るぞう』とモチベーションは上がってくるのだった。私がトップの一班を、木村君がラストの四班を受け持ち、各班の連絡はトランシーバーでとることにした。車で人沢点に向かう。多少増水気味であるが、私はこの沢は勝手知ったる沢なので遡行には支障ないと判断し、突入することにした。

最初の釜でザンブリコする者もでたが、ザイルとお助け紐を多用…順調に進む。徒渉地点の選び方、本流と支流の見分け方、高巻方法とルートを取り方、直登の醍醐味、果ては山菜まで教えながら(山菜は私自身あまり知らないのであるが)登っていく。雨の中、カッパを着ての遡行では楽しくないのでは?と思ったが、皆さんは口をそろえて

『沢登りって楽しいですね』

と言ってくれ私も嬉しかった。今回の為に沢登り用具を新調したという私の班の2名の女性も、本当に楽しそうに登っているのが表情でわかる。白水沢の滝はほとんど直登できるが、わざと高巻をして講習生に



1班の講習生達

『直登と高巻はどちらが楽しいですか』

と質問すると

『絶対直登ですね』

という返事が返ってきた。高巻は必ずしも容易で安全とは限らない、ということが分かってくれたなら、ウー、彼らは将来使い物になるかもしれない。他の班も順調に登って来ているようだ。途中各パーティが離れないよう時間調整をして左俣に入り、3段30mの滝を快適に直登していると後続が追いついてきた。何だかんだと冷やかしかしコールがかかる。茨城労山は規模は小さいが、それだけクラブ間のまとまりは良さそうだった。最後はヤブの滑ぎ方の要領を教えながら登ると、まもなく稜線に飛び出す。雨の中全員が揃うまで待つ。60歳を過ぎた年配の方もいたが、とても元気で満足そうだった。その面々を見ていると、本当に来て良かったという気持ちが沸々と湧いてくるのだった。

下山も一班が先行する。「谷川小唄」ではないが、今日の凱歌に足取り軽く登山道を半分も降りたころ、道は四十八曲がりになりさしかかったときである。バリバリボキッと木の枝が折れる音がしたと思ったら、上のヤブの中からドサッと黒い物体が転がり落ちてきた（様に見えた）。ガスがかかっていて、何だかはっきり分からないので目をこらして見ると、なんと特大の熊ではないか。熊は私達には気がついていない（ようだ）。私はパーティにストップをかけ、熊から見えない所まで後ずさりした。気配からして熊はまだそこにいると思われる。この道を下らなければ他に道はないので、ここは熊君にどいてもらわなければならないまい。全員に笛を出すよう指示し一斉に吹いた。すると熊君は「ウォー」つという威嚇のうなり声をあげたのである。襲いかかってくるのではないかと生きた心地がしなかった。昨日の机上講習で熊の話はしたが、出会ったときの対策までは教えなかった、というか実は私も知らないのだ。私も含め全員顔色がないものの、パニックってはいない。落ち着け！落ち着け！折る気持ちで笛を吹き続けた。どのくらい時間がたったろうか、実際はそんなに経っていなかったのだろうが、笛を止めるとシーンと静まりかえっている。熊君はまだ近くにいらっしゃるだろうか。私がそうと見にいくと熊君の姿はなかった。それからは全員で笛を吹きながら恐る恐る歩く。奥甲子温泉に着いたときは全身の力が抜けたように座り込んだ。後続パーティにも無線で知らせておいたのだが、無線機のスイッチを切ってしまったパーティはなにも知らずにおりてきた。先行パーティはビービーと何をやっているのか、いい大人が笛を吹く練習でもしているのかな？と思ったそうである。知らぬが仏とはこのことかも知れない。それにしても登山をはじめて30数年、今まで熊にあったことなんて一度もなかったのに今年は二度も、それも至近距離で。一度でいいから熊を見たいと思っていたが、もう熊君とは会いたくない。これは先

般おいしい熊鍋を食べたあたりなのだろうか、クワバラクワバラ。これに懲りずに茨城労山に沢登りが定着することを祈って止まない。昨夜泊まった民宿の温泉で体を温めて帰路についた。木村君ご苦労様でした。

出合(8:01)ー終了(12:41)

(本図 記)

追伸、風の便りでは、その後茨城労山では沢登り山行が何回も行われているそうである。微力ながら沢登りを少しでも広めることに貢献できたとするならば嬉しいことである。茨城労山の益々のご発展をお祈りする。

奥秩父 大荒川谷

2000. 6. 17~18

パーティ L 本園一統、渡辺聡子、笹平孝

沢登りの楽しみといえば、焚き火をする事なので、出来れば一拍二日で行く方がいい。今回は、一泊二日なので喜んで参加する事になった。

沢登りに行くのに溪流シューズを忘れてしまったので、家に寄ってもらった。今回、下山の時にバイクで車を回収する為に、雁坂トンネルの入り口付近にバイクをデポした。それから、入山口にある管理釣り場の所にゲートがあるので、少し手前に車を止めて仮眠した。

翌日は、金山沢出合まで長いアプローチを歩く。車道から登山道に入ると、昔の軌道が残っていた。金山出合は広場になっていて、良く整備されてる所だった。ここから金山沢に入沢すると雨が降ってきた。雨に濡れた体は冷えているので、昼食のそうめんは震えながら食べた。この沢の水は意外と冷たくて、水に入っているとビリビリした。小荒川谷出合でビバークすることになった。相変わらず雨が降っていてメインのフライシートと焚火用のフライシートを張った。お陰で、雨の中でも焚火が出来た。この日の夕食は、近くで取れた山菜の天ぷら丼で、とてもおいしかった。

二日目は、天気予報がはずれて、朝から天気が良かった。ここの沢は特に難しいと所もなく順調に進んでいける。三俣からは先はガレ場となり、苦しい登りになる。ガレ場は次第に急になるので、右側の尾根に移り踏み跡を登っていくと、やがて稜線に出る。

稜線で靴を履き替えて、装備を仕舞う。日帰りの山行と比べると、だいぶ荷物が多いので辛い。眺めの良い稜線を一時間ほど歩くと、雁坂小屋に着く。テント場には学生風の人達で賑わっていた。ここから黒岩尾根を降りていく。前半は緩やかな下りで、後半は一気に下る歩きづらい道なので、膝を痛めないように杖を二本使って降りた。林道に出ると、後もう少しでバイクの所に着く。バイクは、トンネルの入り口か5m位の所にデポしたので無事あるかドキドキしながら降りていった。バイクは無事だったので一安心。本園さんが車を回収してくる間、ウドを見つたりしていた。ここから車を止めた所まで10km位あるので、バイクの有り難さが良くわかった。



大荒川谷の廻行 “それ！、がんばれ！渡辺！。流されるな！”

6/17

駐車場(8:00)ー金山沢出合(11:30)ー小荒川谷出合(14:20)(ビバーク)

6/18

小荒川谷出合(8:00)ー三俣(10:00)ー稜線(11:50)ー雁坂小屋(13:30)ー雁坂トンネル(16:20)

(笹平 記)

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman No. 179 2000. 4 B5 28p 浦和浪漫山岳会

上越・荒沢山、越後・上黒姫沢左岸尾根～黒姫～守門岳～大原スキー場、荒海山朝日岐沢左岸尾根、蔵王山スキー、高柄山、奥多摩・川苔山ほか

◎Rohman No. 180 2000. 5 B5 52P

南会津・ブナ沢山、三ツ又～猫岩右尾根、奥利根・高檜山～尼ヶ禿山、上越・白毛門、南会津・栃尾又沢左岸尾根ほか

◎Rohman No. 181 2000. 6 B5 52P 浦和浪漫山岳会

会越・叶津川本流～池ノ平～熊ノ沢～タカヅノ山の肩～タカヅノ沢右岸尾根、春合宿、特集・南会津の白戸川源流と会津朝日岳周辺を4パーティで週行ほか

◎わらじ No. 529 2000. 4 B5 20P わらじの仲間

冬の集中・八海山、小蓮華岳1は菱、頸城・戸隠P6、北了抜戸岳南尾根、八ツ・権 現沢右俣中央稜ほか

◎わらじ No. 530 2000. 5 B5 20P わらじの仲間

越後・荒山中央稜、毛猛山塊・丸山スキー場～大鳥沢右岸尾根～大鳥沢せいの沢～瀧 澤中間尾根～末丈ヶ岳～丸山スキー場、東北・新庄神室、南了・転付峠夕；軒小屋～ 脈幅尾根～脈燈岳、初岳・池ノ平山ほか

◎わらじ No. 531 2000. 6 B5 24P わらじの仲間

春の集中・奥秩父雁坂峠、黒部・鹿島槍～牛首尾根～十字峽ぐ Gandou 尾根～八ツ峰1峰IV稜～初岳～早月尾根、室堂～初沢～池ノ平山スキー、八甲田～八幡平～裏岩手～ 葛根田源流～秋田駒、フリークライミング通信ほか

◎逍遙 No. 107 2000. 4 B5 14P 逍遙溪稜会

丹沢・水無川本谷、南会津・二岐山、北八ヶ岳・天狗岳、丹沢・唐沢川大野沢、尾瀬・富士見峠、丹沢・杜宮司沢ほか

◎逍遙 No. 108 2000. 5 B5 12P 逍遙溪稜会

奥多摩・倉沢谷、塩地谷、丹沢・谷田郎川不動沢～唐沢川、丹沢・中川川白石沢モロクボ沢、レスキュー訓練、尾瀬・鳩待峠～尾瀬ヶ原～あやめ平～富士見峠ほか

◎逍遙 No. 109 2000. 6 B5 20P 逍遙溪稜会

丹沢・マスキ嵐沢、春合宿・白川又川奥剣又谷、大黒川谷、旭ノ川中ノ川、奥秩父・雲取山～将監峠、奥多摩・惣角沢、奥秩父・笛吹川東沢鶴冠谷右俣ほか

◎Next! No. 52 2000. 4 B5 12P 山岳渓流釣り集団むげん

仲間の近況報告、花粉症対策ほか

◎Next! No. 53 2000. 5 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん

仲間の近況報告、佐渡の山菜採り、リレーエッセイほか

◎Next! No. 54 2000. 6 B5 10P 山岳渓流釣り集団むげん

仲間の近況報告ほか

◎とまのかぜ No. 89 2000. 4 B5 31P 童人トマの風

八ヶ岳・旭岳東稜、袖添尾根、四万十川滑床溪谷、東ロビ・焼石岳山スキー、上州・前武尊東尾根、玉原スキー場～尼ヶ禿山、西表・板敷川右俣～後良川ほか

◎とまのかぜ No. 90 2000. 5 B5 37P 童人トマの風

八ヶ岳・天狗尾根、船形山テレマーク、谷川岳東尾根、マチガ沢雪上訓練、八ヶ岳・中山尾根、阿弥陀岳北西稜、足拍子岳南尾根、白毛門、頸城・放山、南会津・会津駒ヶ岳、北高尾山稜、奥多摩・大雲取谷、東北・葉山山スキーほか

◎とまのかぜ No. 91 2000. 6 B5 44P 童人トマの風

平標山ヤカイ沢、至仏山山スキー、頸城・焼山北面台地、昼間山、放山、丹沢・モロクボ沢～イデン

沢～水ノ木沢、利尻山南稜、島海山山スキー、八ヶ岳・御小屋尾根、白馬岳主稜、桑原山塊・前川小
白沢～桑原岳、妙高・三田原山、奥多摩・小川谷犬麦谷、小川谷割谷ほか

◎山紫水明 No. 60 2000. 4 B5 18P 山旅の会

日和田山岩トレ、裏山ハイクほか

◎山紫水明 No. 60 2000. 5 B5 12P 山旅の会

ドイツ・ケルン付近の山、スギナ沢、丹沢・水無川ほか

◎山紫水明 No. 62 2000. 6 B5 18P 山旅の会

十二ヶ岳岩トレ、山菜ハイク、滝子山集中・柏木沢、滝子沢左俣、ズミガ沢ほか

◎すずらん通信 No. 229 2000. 4 B5 12P 鈴蘭山の会

親睦山スキー、ヒヤリ・ハット報告、八幡平、上信国境尾根、布引山ほか

◎すずらん通信 NO. 230 2000. 5 B5 16P 鈴蘭山の会

谷川・雪上訓練、信越・乙妻山山スキー、巻礫山～柄沢山～ノミオ沢スキー、頸城・小谷温泉～天狗
原山～金山～富士見峠～笹倉温泉スキー、信越・志賀竜王～カヤノ平～遠見他～五宝木牧場～ 極野、
月山、浅草岳、白山ほか

◎すずらん通信 NO. 231 2000. 6 B5 19P 鈴蘭山の会

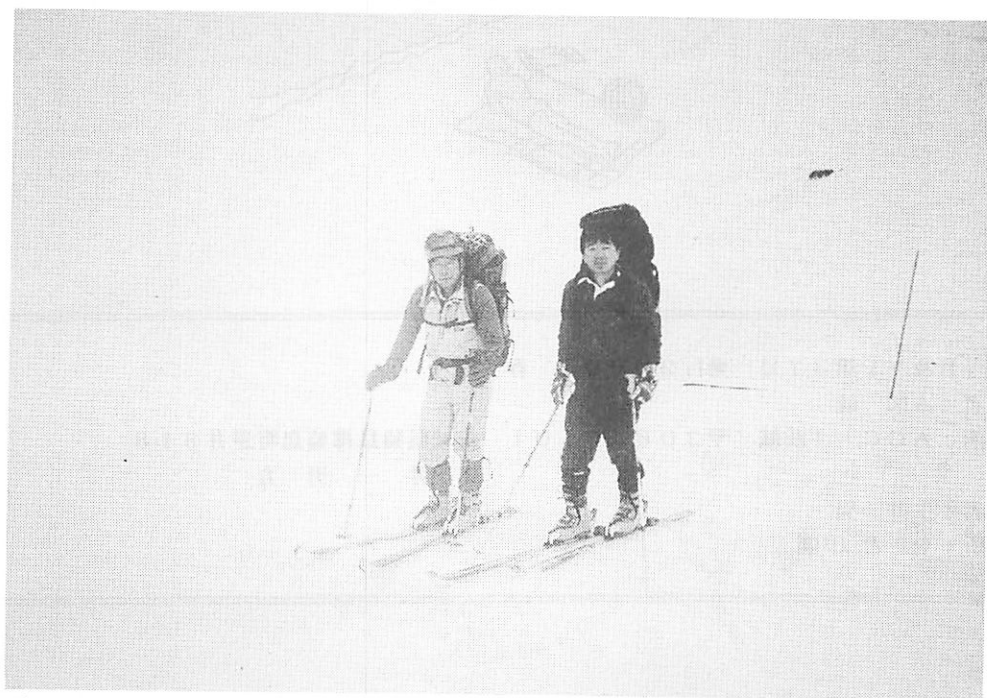
北ア・白馬岳金山沢白馬沢右俣滑降、裏銀座オートルート、谷渡り新オートルート、奥多摩・南秋川
失軍刀利沢ほか

会報

◎ADVENTURE・forum NO. 2 2000. 4 A4 8 植村記念財団

植村さんは極地の最高のカメラマンだった、危機的状況をバネに冒険を成功させる、インタビューほか

以上閲覧したい方は本図まで



ゴールデンウイーク洞沢山スキー組の二人（木村、中島）

編集後記

チョモランマの渚という話を知っていますか……？。チョモランマはむかし海だったのです。その昔、 Gondwana大陸が分裂し、その一部だったインド大陸が北上してアジア大陸と衝突したのです。その時 Gondwana大陸とアジア大陸との間にあった太古の海、テーチス海が盛り上がりヒマラヤが作られたのです。

以前バキスタン（フンザ）に行った時に、その道中で衝突現場を目の当りにしました。むき出た地層が縦に横にまるで飴のようにねじ曲がり、衝突の計り知れないエネルギーを感じました。

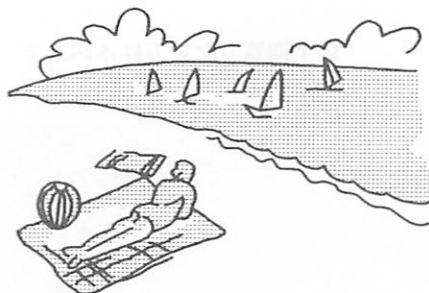
皆さんもご存じだと思いますが、チョモランマのイエローバンドは太古の昔そこが海底だった証です。チベット高原に行くときあちこちに二枚貝やアンモナイトなどの化石が転がっています。4千メートルを超える高原で海の化石があるなんて何か不思議です。そんな偉大な自然を見ていると人間の力なんて、と思ってしまうですね。

いつかチョモランマに行く機会があれば、私はこういつて出かけるでしょう。

『チョモランマの渚を見に行ってくるネ。おみやげは、二枚貝のイヤリング』
ってね。

会員の皆さんも、チョモランマの渚を見に出かけませんか？？。

（編集長）



季報 [R&V] 第37号 発行2000年 春

発行者：本図一統

発行所：ACC-J 茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団